

第 7 回 子どもを真ん中に親とパートナーになる ～思ってもみない親の意見はモンスター？～



講師 静岡福祉大学特任講師 岡村由紀子 氏

はじめに

私にとって保護者対応の問題は、20 代の頃連絡帳に記された保護者の意見が最初でした。私は、一生懸命やっているから子どもも保護者も満足していると思っていたのです。しかし、私の思いを理解してくれると思って相談した大学教授からは、「それは親の中に真理があるからでしょう。親がみる真実と保育者がみる真実はずれているのです。」と言われたのです。保護者と保育者のどちらがプロかと言えば、それは保育者です。子どもを真ん中にして保護者と手を繋ぐとはどういうことなのか。こちらの思いを保護者に伝えるためには、保護者にわかる言葉を使わなくてはいけない、とこのとき思ったのです。

保育者はどんな親が相手でも、客観的に、仕事として、子どもの利益を守っていくスキルを上げていかななくてはなりません。

親が子どもを思う気持ちは、形は違っても、差はないと実感しています。

1 現代の子育ての事情と昔の違い

まず、家族です。昔、食材は自給自足でした。衣類は、蚕で糸を紡いで調達しました。家は村の人が集まって、協同で造りました。家具も、自分たちで木を切り出して作りました。病気の時は、薬草を使って、煎じたり、塗ったりしました。出産は産婆さんが手伝ってくれました。このように、家族や地域のみんなでやっていたのです。子育てもそうでした。

園の近くの老人会の方に、昔どのような子育てをしていたかを聞いたことがあります。すると、70、

80 代の方は、自分が若い頃は子育てをほとんどしていないと答えました。労働の主体は若者です。産んだ後おっぱい以外は、おじいさん、おばあさんがやる。1人で子育てをするのではなく、みんなでやっていたのです。百姓というのは、百の技をもつ人、いろんな知恵をもつ人のことだと聞きました。また、地域で子どもを育てていたので、昔はイクメンが当たり前でした。

江戸時代になり、宣教師が入ってきました。日本の子育てを本国のヨーロッパに伝えた記録が残っており、それによると、父親が子育てに参加していたことや、寝かす時、背中におんぶして子守唄を聞かせていたなど、子育てがとても穏やかで静かだと書かれています。父親が子育てに参加するということは、家庭内労働だったということです。

次に、子どもです。子どもは地域で、異年齢の集団に巻き込まれて、遊びや友達との付き合いを覚えました。今でいう保育の縦割りの中で、年齢の大きい子が小さい子をフォローし、小さい子は大きい子にあこがれていく中で、遊びの技や規律を覚えていきました。昭和初期の写真集に、小学校 3、4 年生くらいの子が小さい子の世話をしながら群れで遊ぶ姿があります。集団で徹底的にいじめることはありません。集団の係り方、一緒に遊ぶための技、思いやりやあこがれが混在していました。

そして手伝いです。昔の手伝いは、家族の役に立つものでした。やらなければならないことを手伝うことで、みんなが生きていけたのです。井戸から水を汲んでこなければ食事ができません。遊びたくても、生活のために大事な手伝いをすることで、自己

コントロールが育ちます。人の役に立つことが、学童期に集中して学習する土台に繋がっているのです。そう考えたとき、今の生活の中には、子どもが知恵をしぼり工夫をすることがほとんどありません。親自身も、そのような経験がありません。子ども時代を奪われた親が、今子育てをしているのです。

1964年の東京オリンピック開催のため、東京に広場がなくなりました。地方から出稼ぎ労働者が集まり、核家族化が進みました。合わせて電気が進んだことは、家事労働を助けた部分もありますが、人間関係が豊かになることはありませんでした。つまり、子育てのモデルやアドバイザーが身近になくなってしまったのです。だから白湯を買い求めようしたり、紙おむつが出回り、「うちの子のおしっこがブルーではない」と救急に相談したりする人がいるのです。私も最初の子どもが夜体調を崩したときは心配でたまらず、タクシーで救急を受診しました。こういうことを何度か経験すると、夜中に受診しなくても、水分補給をさせながら様子を見て、朝になってからかかりつけ医を受診するようになるのです。子育ては塩梅が大事で、ノウハウはないのです。

子育ては具体的な経験を通して自分の子どもに向き合う仕事です。それを、すべてインターネット情報で得ようとするからうまくいかないのです。インターネットの情報は平均的なことを言っているのであって、AさんとBさんの子どものCさんのことを言っているのではないのです。

そのような状況でカギを握るのは、毎日子どもをみている保育者です。保育所、幼稚園、認定こども園は、子どもや親が集まる場所で、互いの顔が見える仲間です。ここをどう組織していくかというのが、私たちの仕事になるのです。

今の子どもは、空間、時間、仲間がない状況に置かれています。私はバーチャルな世界を見ても、体感した経験があるから、うそっこだとわかりますが、

最初からうそっこしか知らない子どもは、映像の中に出てくるのが現実だと捉えてしまうのです。本来人間の脳は、体感を通して認知します。ところが全く違うことが0歳児から起きると、子どもはどうなってしまうのでしょうか。「これは大事」「痛いって言うてるよ」ということがどのように子どもの体感として伝わるのか。言語でコントロールしたり、コミュニケーションしたりすることの意味が想起できるのか。子どもの脳がリアリティーな経験をもっていないことが、とても怖いことだと感じます。それが今の子ども達です。母親が「やめなさい」と言ってもやめない。「友達が泣いているでしょ」と言っても、「痛い」がどういうことか、「気持ち悪い」がどういうことかわからない。人間は思考することが大事です。しかし、非認知経験が弱いと、言葉で伝えるだけでは伝わらないということが起きてしまうのです。

昔と違って、現代は子どもが育つ環境が豊かではないのです。親を理解するためには、遊びが変化していること、“乳幼児期は経験を通して認知する”という土台経験が崩れ始めていることがどうなるかを、保育者が学ばなくてはなりません。

2 親を理解するための学び

人間の赤ちゃんは、現実の光を浴びて、現実の景色を見たり、自分で動いたりしていくことで、立体視力が上がり、視力は発達していきます。平面ばかり見ていると、立体視力が上がっていきません。そして体を動かさないと、体温も上がりません。

今、医学の現場では、ゲーム障害という診断名が付くようになり、治療の対象となっています。前頭前野（一番大事な思考する脳）が動かない症状で、想像力（現実を捉え未来を予測していく）が低下します。想像というのは、どうしてだろう、なぜだろうという思いがない限り、発達が難しく、0歳児からやる“いないいないばあ”やつもりになる、うそ

この遊び、特にごっこ遊びが非常に重要になります。細い葉を焼きそばに見立てて遊んでいても、「これ葉っぱじゃん」という子どもに対しては、「焼きそばみたいに細い葉っぱだね」と言い方を変え、双方の言葉を受け止めます。

電子機器によるバーチャルの世界で遊ぶ環境が拡大すると、人間関係の応答力が下がり、自然が激減し、人間が育つ環境がなくなってきました。そうすると、親の言葉が子どもに届かなくなります。そんな親の悩みに対応するため、保育者がヒントを伝えるときには、こうした今の子どもの状況や、子どもの中で起きていることを掴んでおかないと、今までどおりのやり方では、伝わらないのが現状です。

3 子育ての知恵の共有

キーワードは、子育ての知恵、親子を知る人の繋がり拡大です。園が中心になり、親、友達、子育て支援センター、先輩等たくさんの人に囲まれて子育てをします。

この間、「子どもが食事中に席を立つ。どうしたらよいか」という相談を受けました。保護者にどのように対応しているのか聞くと、「追いかけて口に入れている」とのことでした。そこで、「これから一週間、泣くかもしれないけれど、この方法でやってみようか」とある提案をしました。席を立ったら、「もう、ごちそうさまか」を聞くようにしました。おなかがいっぱいかどうかを自分で判断することになります。ごちそうさまかと聞いたときに、「うん」と言ったら、「だったら座って食べようね」と短く言います。もうごちそうさまだと言ったら、「だったら座ってごちそうさまをして片づけようね」と言います。少しして、お腹がすいて戻ってきても、そこであげてはいけません。一週間ほどすれば、こういうルールの中で、おなかがいっぱいになったらごちそうさまだと、自分の身体を知っていきます。自分の身体を知るという営みが、やがて自分

の心を知ることにつながります。

2歳児くらいから「いや」という言葉を使うようになり、3歳児くらいになると「食べたくない」など言葉が豊かになり、自分の気持ちを言葉にして伝え、身体と心の主人公になっていきます。保護者には「そこはお母さんが我慢するんだよ」「そうして子どもは自分の心を知るんだよ」と子どものことを伝えました。母親が子どもの心を知るチャンスにしていくのです。

また「我が子が寝ないので困っている」という悩みに対し、保育者として、睡眠のリズムや昼寝時のことを伝えることができます。しかし、母親は家で父親がいない時間に泣いている子ども2人を相手に一人で対応しているのです。この条件の知恵は、保育者ではなかなかもっていません。そこで私の園では、今、子育て中のママたちに、「〇〇さんのママがこういうことで悩んでいます。皆さんの知恵を募集します」と声を掛け、集まった知恵を園便りで発信しています。園は親が子育てを楽しく感じる場所です。いろいろな人がいて、保育者というプロがいる。だから親も集まっているのです。

今年から来年にかけて焼津市が取り組んでいるのが、まさしくこれです。子育ての知恵を親たちに伝え、子育てを楽しく感じられるように働きかけようとしています。

4 大人たちの役割

子どもにたくさんの愛を伝えることが、子どもを幸せにします。親は、本能的に、子どもはかわいいと思うものですが、それができないということは、その親を取り巻く状況が、大変苦しいということです。そのようなときは、人と比べず、尺度を押し付けず、出来栄を問わず、相手のありのままを受け止めることです。「そのくらい大変なんだね」と声をかけてあげることです。WITH YOUではなくIN YOUです。

子どもが転んだとき「痛くない」を決めるのは本人です。ですから大人は「痛いんだね。どうしたらいい」と聞きます。「冷やして」「抱っこして」と言ったらそのようにします。決めるのは子どもで、大人は手助けをするのです。子どもは親の私有物ではないのです。

私の園では、子育ての悩みを、同じ体験をしている親に問いかけ、集まった知恵を皆さんに配信しています。これが結構効果的で、「やってみたらうまくいきました。どの方が教えてくれた知恵ですか」と聞かれます。自分の心にフィットするものが見つかり、そこから新しい出会い、新たな会話が生まれています。10 くらいの知恵の、興味があるものからやってみる。やってみてダメなら、また別の方法を考える。そうしてだんだんその子に合う方法が見えてくるのです。インターネットの情報ではなく、実体験の知恵をみんなで見分けていくことで、ここにネットワークができていくのです。

働くことにより、親子での時間が少ないことが、子どもの心にどう影響するのか。今私が問題意識をもっていることです。例えば一緒に過ごす時間が少なくなると、買い物の仕方の細かいことを伝えるなどの社会経験が少なくなる、というのは研究されていますが、子どもの心にとってどうか、という研究はなかなか難しく、結果は出ていません。ただし実感として、親子が一緒にいることがとても意味のあることだと皆さんも感じていると思います。

そこで私は保育者の知恵袋として、私の思う範疇で発信することを始めました。愛着の土台の形成は0歳児の皮膚接触です。その延長線上にあるのが、目と目を合わせることです。次に手を繋ぐこと、やがてそれが人間の音声という、機械音でなく生の言葉で脳に入ります。学童期前の年齢は体を通した認知する力が大事です。特に目と目を合わせる事が介護の世界で大事だと、ある番組でやっていましたが、私はこの番組を見て、親子も一緒だと思いまし

た。

保育理解のために子どもの心を知ることも、情報発信しています。「大人から見たらゴミでも子どもには宝物になる」「降園時のぐずり改善ポイント」など、園で出会ったお母さんが悩んでいることなども皆さんに伝えています。

また生活の一緒シリーズの情報として、なるべく親に負担がなくすぐできるものを伝えています。買い物に行く、洗濯物をたたむなどでは、「助かるよ、ありがとう」という気持ちを伝えると共に、算数の重さや図形の概念の経験をしています。「重い大根の方がおいしい」と重い方を選ぶことで、重さの勉強になります。洗濯物をたたむことで、形が変わることを知ります。そして、買い物ではお金を払い、流通の勉強をします。お金を払わない限り、物を持ってきてはいけないことを学びます。道徳教育で教えるより、一緒に買い物に行って実体験で学ぶ方がずっといいです。流通の学習をするとともに、お金の概念がわかります。千円札を出したら、百円玉が4つもかえってきた、というのは、子どもにとってとても不思議な世界です。やがて、千円札、五百円玉、百円玉等を知ることになります。“生活を一緒”は、様々あります。「子どもの世話をして」と言っているのではなく、日常の小さな知恵が、子どもと親の心を繋ぎ、豊かにしていくのです。

おわりに

子どもを真ん中にして親とパートナーになるためには、保育者が勉強してスキルを上げ、親理解を深め、親が納得する情報を発信する必要があります。

どの父親も母親も我が子に幸せになってほしいという願いをもっています。ここに絡めて、手を繋いでいくことで、子どもは幸せになるのだらうと思います。プロとして、親の背景を掴み、子どもの心で語り、保育を進めるという皆さんの役割は、ますます大きくなると思っています。